

# 「国語史」における、「病理」と「治療」

高橋 顕 志

## 0、はじめに

言語地理学では、ことばの変化に関して、「病理」「治療」というメタファーを用いることがある。言語変化の激しいフランスで生まれた言語地理学ならではの表現であり、これは「ジリエロンのライトモチーフ」になっているとさえ言われている（馬瀬（1969））。小論では、その考え方を「国語史」の中に導入してみようと思う。

## 1、幼児語源

日常の生活の中で、子供たちが新たな「ことば」に出会ったとき、彼らは、われわれ大人が意図するのではない、違った受け取り方をしていることがある。それらの例を、「分節」「引き当て」という術語を軸にしなが、次のような2類4種に分け、整理したことがあった（高橋（1991））。

- 1 形態素分節では文化（T）に沿っているが、形態素引き当ての段階で文化（T）に沿わない場合
  - 1-1 同音異義の形態素に引き当てられる場合—「同音牽引」—
  - 1-2 類音異義の形態素に引き当てられる場合—「類音牽引」—
- 2 形態素分節の段階で文化（T）に沿わない場合
  - 2-1 手持ちの形態素を代入する
  - 2-2 新たな形態素を創造する

今、しばらくそれらのひとつひとつについて、代表的な具体例をあげ、以下の考察の導入とする。

- 1-1 同音異義の形態素に引き当てられる場合—「同音牽引」—

唱歌「仰げば尊し」の一節 [イマコソワカレメイザサラバ] の部分を、「今こそ別れ目、いざさらば」と考え、「今こそが、（先生と）別れていく、その別れ目なんだ。だから、（先生）さようなら」と解釈している例である。ここでは、

[イマ/コソ/ワカレ/メ/イザ/サラバ]

というように、与えられた音連続を形態素に分節する段階での間違いはないが、分節された「メ」の部分に、「意志の助動詞『む』の已然形＝メ」を引き当て、「今こそ、さあ、別れましょう。（先生）さようなら」と解釈するのではなく、その部分に「物事の境となるような状況＝メ」を引き当て、さきのような解釈をしているのである。これは、彼の語

彙体系の中にすでに存在した、同じ音を持った別の意味の単語に、ひきずられ（牽引）てしまったと考えられる例である。

### 1-2 類音異義の形態素に引き当てられる場合－「類音牽引」－

【シンサンキョーイチョーヤク】と発音されるテレビコマーシャルを聞いた子供が、

【シンカンチョーイチョーヤク】

と発音している例である。与えられた音連続を

【シン／サンキョー／イチョー／ヤク】

というように、形態素に分節する段階での間違いはないが、分節された「サンキョー」の部分に、「製薬会社名＝サンキョー」を引き当ててのではなく、その部分に、「オナカが痛いときに飲むお薬だから浣腸なんだ」と考え、【浣腸＝カンチョー】という別の語を引き当て、さきのように発音しているのである。これは、彼の語彙体系の中にすでに存在した、似た音を持った別の意味の単語に、ひきずられ（牽引）てしまった例と考えることができる。

### 2-1 手持ちの形態素を代入する

「君が代」の一節【サザレイシノイワオトナリテ】の部分で、

【サザレ／イシ／ノ／イワオ／ト／ナリテ】

と分節し、「さざれ石の、巖と成りて」と意味解釈するのではなく、

【サザレ／イシ／ノ／イワ／オト／ナリテ】

と分節し、「さざれ石の、岩音鳴りて」、すなわち「ちいさな石の、(否)、岩の、音が鳴っている」と解釈している例である。「巖」という単語をまだ持っていない子供が、自分がそれまでに獲得し、自由自在に使うことのできる単語（手持ちの形態素）「岩」「音」をもとに分節し、それを引き当てている。また、それにしたがって「成りて」の部分を「鳴りて」と解釈している例である。

### 2-2 新たな形態素を創造する

唱歌「荒城の月」の一節【メグルサカズキカゲサシテ】の部分で、

【メグル／サカズキ／カゲ／サシテ】

と分節し、「巡る盃、影射して」と意味解釈するのではなく、俚言「帽子などを頭にかぶる＝カツク」に牽かれ

【メグルサ／カズキ／カゲ／サシテ】

と分節してしまい、意味解釈不可能な【メグルサ】の部分について、文脈から、「まだみたことはないけれど、この世には『メグルサ』と呼ばれる帽子のようなものが存在するのだろう」と考えていた例である。

以上、2類4種に分け、子供たちのおかすことばの間違いを分析したのであったが、彼の心の中で行なわれているこれらの操作は、「その時点で彼が持っている、文化・語彙体系の秩序維持・保守の方向に働く」ものとして位置づけることができた。

日常毎日の生活の中で、周囲から大量にことばが流れ込み、それらひとつひとつが自分の語彙体系の中で浮遊している状況を、ひとつの病理的な状態であると考えれば、その病理に対して、彼らは、自分がその時点で獲得している全経験を総動員して、それを治療しているのであると考えることができる（たとえ「誤った治療」であったとしても）。「2-2 新たな形態素を創造する」で見たように、彼らは、自分の枠組みにしたがって、新しい単語さえ作り出していくのである。

これらの現象には、従来、言語地理学で「民衆語源」と呼ばれ言及されてきた現象（高橋（1989））と同じメカニズムが働いていると考え、子供の、このような間違いに「幼児語源」と名付けたのであった。

ことばが大量に流入し、語彙体系の中で浮遊しているという病理的な局面にあたって、彼らはこのように「幼児語源」を働かせ、ひとつひとつの単語に治療を加えながら、自分の語彙体系の中に納めていくのである（このような誤りをおかす子供たちに対する、言語教育のあり方について、さらに考えなければならない）。

ところで、このように「幼児語源」が働き、その結果、ことばの意味や形が改変されていることは、ほとんどの場合顕在化しない。ことに、

1-1 同音異義の形態素に引き当てられる場合－「同音牽引」－

2-1 手持ちの形態素を代入する

2-2 新たな形態素を創造する

に分類されるものについては、このような「幼児語源」が働き、子供の心の中でそのような処理がなされていることなど、誰にも（本人にしか）わからないのである。本人も気づかない場合が多い。唯一、

1-2 類音異義の形態素に引き当てられる場合－「類音牽引」－

の場合のみ、彼の口から発せられる音が、[サンキョー]でなく[カンチャョー]であることに気づいた観察者によって、はじめて、彼の心の中でこの「幼児語源」が働いていることを知るのである。

従来、言語地理学で「民衆語源」と呼ばれ提示されてきた例は、[シャベル]が[シャピロ]になったり[シャボル]になったりという、やはり語形が改変されたものであった。すなわち、「類音異義の形態素に引き当てられる場合（「類音牽引」）」のように、顕在化するものばかりなのである。しかし、「幼児語源」での考察を敷衍すると、「民衆語源」の中にも、さきの、

1-1 同音異義の形態素に引き当てられる場合－「同音牽引」－

## 2-1 手持ちの形態素を代入する

## 2-2 新たな形態素を創造する

にあたるものもあるに違いない。これらは、顕在化しないから指摘されてこなかったのだと考えることができる。今後、私は、「民衆語源」をこのように広くとらえようと思う。

## 2、破壊の方向

ことばが大量に流入し、語彙体系の中で浮遊しているという病理的な局面にあたって、見てきたような「治療」が行なわれなければ、ときに、彼の語彙体系は破壊される方向へ動くことがある。さきの論の中で、一応の分類では、

### 1-2 類音異義の形態素に引き当てられる場合—「類音牽引」—

とみなされるものとして、「競泳の選手が使用するような二眼式の水中眼鏡=ゴーグル」を、[ゴーフル]に改変している例をあげ、「語彙体系の破壊に繋がる方向である」と述べた。これは、大量流入という病理が、「幼児語源」によって治療されず、混乱という病的状態のまま経緯している状況であろうと考えたのであった。この例は、もはや「幼児語源」とは呼べない。

この種の間違いは、大人たちが外来語を使用する場合に多く出現する。以下、私の身の回りから集めたものをあげてみる。

タイムリミット	==>	タイムメリット
カイロブラクティック	==>	カイロプラスティック
プレートテクトニクス	==>	プレートテクニクス
フィードバック	==>	フィールドバック
ダウンベスト	==>	タウンベスト
トラッド	<=>	トレンド
キャンパス	<=>	キャンバス
マーマレード	<=>	マドレーヌ
ランバタ	<=>	バンダナ

ひとつひとつの説明は、もはや示す必要もないだろう。とにかく、(知ったかぶりをした、カタカナ語を使いたがる)大人たちの会話を注意深く聞いていると、このような、明らかに間違った発音をしていることがあるのに気づく。

子供たちは、新しい音連続の大量流入に対して、見てきたように、自分の経験を総動員しながら「幼児語源」という治療手段を働かせ、ひとつひとつをなんとか納得しようとしていた。それに対し、大人たちは、外来語の大量流入という局面において、「民衆語源」という治療手段を働かせるでもない。ひとつひとつのことばが語彙体系の中で浮遊したままという、病理的な状態のまま推移する。外国語だから、語源などわかるはずがないと、最初から語源探索を放棄している。ならば、その外国語の意味を正確に把握し、他と明確

に弁別し、正確に使用すべきだが、それも行わない。したがって、「わけのわからない外来語を、わけのわからないまま使用する」という状況が現出するのである。

考えて見れば、わけのわからない外来語を、わけのわからないまま使ってきた実績が、日本にはある。

馬から落ちて落馬する。	後で後悔する。
旅行に行く。	犯罪を犯す。
まだ未決定です。	すぐ即戦力になるような人を・・・
括弧で括る。	落雷が落ちる。
並列に並べる。	郵送で送って下さい。

前二者について、人々はその言い回しの剩語性に気づき、とやかく口にのぼせることがあるけれども、他の例はどうであろうか。毎日の言語生活の中で、聞くことがあるものばかりではないであろうか。

大量に中国語が流れ込んできたときに、そのひとつひとつを意味的に十分に吟味せず。ただ、その音のみを輸入したにすぎなかったのではないだろうか。つまり、病的な状態のまま、それを治療しなかったのである。そして、外国語との接触という局面において、そういう傾向は習い性になったと考えるのである。

### 3、ことばの「病理」とその「治療」

言語地理学では、長年の使用や他言語との接触で、言語に病的な状態が生まれることがあると考える。そして、言語を使用する人間たちは、その病理に治療を加えると見る。たとえば、①単語家族の減少により、語源がわからなくなってきたという状況を、ことばが「病気になる」と見、民衆たちはそれに「民衆語源」を働かせ、自分の言語体系の中で、納得のいく形に作り替えてしまう。それを「治療した」と見るのである。さらには、②音韻変化という摩耗により、同音異義語が出現し、弁別性が損なわれたという状況を、ことばが「病気になる」と見、単語に何らかの接辞を付加することによって弁別性を回復する。それを「治療した」と見るのである。

これらは、①「単語家族の減少・・・」、②「音韻変化という摩耗・・・」という、いわば言語内的変化（長年の使用）に起因する「病理」とその「治療」の側面であるが、言語外的変化（他言語との接触）に関わる次のような局面もある。すなわち、③侵入してきた新しいことばが、自分たちの言語体系の中で納得できないという状況を、ことばが「病気になる」と見、自分たちの納得のいく形に作り替えてしまう。それを「治療した」と見るのである。

さきにもてきた「子供」や「大人（日本人）」のおかれている状況は、他言語との接触、それも、一時大量流入という「病的」な状況であると考えることができる。それに対して、子供は「幼児語源」を働かせて「治療」を試みているが、大人（日本人）は「治療」を放

棄していると考えることができたのであった。

#### 4、「国語史」における、「病理」と「治療」

日本人は、現在、外来語の流入に対して治療を放棄している。また古く、漢語の流入に対して治療を施さなかったとみた。以下、日本語の歴史をさかのぼり、もう少し広く、かつ、歴史的に長いスパンで、「病理」「治療」を考えてみることにする。以下、「病理」をもたらずものとして、さきの分類にしたがい、言語外的な契機と言語内的な契機とに分けて考える。

##### 4-1 言語外的な契機

日本では、飛鳥・奈良・平安時代、明治時代、昭和40年代から現在までの時期、都合三度、外国文化の大量流入の時期があった。

飛鳥・奈良・平安時代という第一回目の大量流入のとき、つまり、国風暗黒の時代、あこがれの中国語・中国音は、日本語・日本音とは大きく違っていた。しかしながら、社会・文化・経済の圧倒的な実力差に、大量の文物が輸入される。このとき、日本語は、言語のもっとも根幹部分である音声・音韻の部分までゆるがされるような「大病を患う」。

その結果、国語史上

ラ行音が語頭に立つ 濁音が語頭に立つ  
拗音の成立 促音の成立 撥音の成立

と呼ばれる現象が生まれる。

前二者は、語彙の問題としてとらえるべきだが、音声・音韻の問題としても重要であろう。後三者は、日本語になかった音節が新たに生まれたことを示す。CV構造の音節しか存在しなかったところへ、CSVの音節、Cだけからなる音節が生まれるのである。言語のもっとも根幹的な音節構造のレベルで大きな傷を負うのである。その後、その枠組みに従った表記法も確立しはじめる。

日本語が「大病を患い」、その結果、体質まで変化させられてしまい、それらは、そのまま、中央語の中で確立してしまったと考えることができる。「侵入してきた新しいことばが、自分たちの言語体系の中で納得できない」という状況になりはしたが、「自分たちの納得のいく形に作り替えてしまう」という操作、つまり「治療」を行なわなかったのである。

第一回目の大量流入のとき、このような流れの中で一度受け入れたけれども、その後、時間をかけてもとに戻したものの、治癒させたものがある。「拗音」に分類されるものの中の、「合拗音」と呼ばれる種類の音である。すなわち、それはその後、国語史上「直音化」と呼ばれる変化をおこし、自分たちの納得のいく形（CV構造）に作り替えてしまったの

である。ただ、方言では、治療しきれていない、つまり、現在でも [kwa] [gwa] を受け入れたままになっている地域があることは周知の事実である。四国に関して言えば、愛媛県・香川県・徳島県ではこの音を聞くことができる。一方、四つ仮名に代表される古い音相を残す高知県では、この音を聞くことができない。いち早く治療してしまったと考えることも可能だが、高知県には、もともとその音が入って来なかったと見ることもできる。

日本語は、第一回目の大量流入で「大病を患い」、その結果、体質まで変化させられてしまった。そのとき C だけからなる音節が生まれ、結果として CC という連続、つまり二重子音が可能になった。それとまったく並行的に、VV という連続、つまり二重母音も可能になった。それは、外来語だけでなく、在来の日本語にもその影響が及ぶ。つまり、

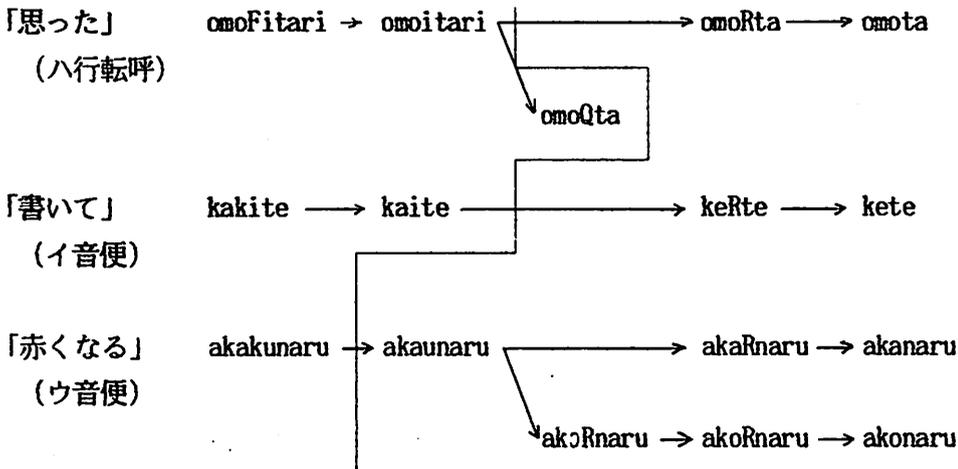
ハ行転呼      イ音便      ウ音便

の現象がおこるのである。

それらの、その後の変化をたどってみよう。

R = 長音

Q = 促音



文献国語史上、「二重母音の長母音化」と呼ばれる現象、さらに、中世後期、「秀吉書状」などを資料にしての「長母音の短母音化」と称される現象、さらには、中央語だけでなく、確認されている方言でのいいまわしをも含めて、その変化をたどってみた。

共通語・書記言語では、縦の線の所までしか動いていないが、方言の世界では、そこが規範や書記言語に左右されない、自由奔放な言語変化の世界であるから、最後まで行き着く。そして、行き着いた先は、みごとな CV 連続の世界である。「荒磯 [ariso]」「我妹 [wagimo]」などの例を見ながら、古代日本語は CV 連続の世界であったと、「国語史」の冒頭で教授していくのが常であるが、このような自由奔放な変化のはてに、再び、CV 連続の世界にたどりついているのである。

私は、この大きな流れを、ことばの「病理」「治療」で説明しようと思う。

第一回目の大量流入のとき、「二重母音」を一度受け入れたけれども、その後、何百年かの時間をかけて、もとに戻した、治癒させたいのである。つまり、日本人の納得のいく形（CV 構造）に作り替えてしまったと考えたいのである。

もちろん、その流れは遅々として進まない。体質を変えられたままの姿で確定されていく中央語・書記言語・規範に邪魔をされる。それらに左右されない、自由奔放な言語変化の場である方言の世界で、この「治療」は、一部、完遂されていると見るのである。

第一回目の大量流入のとき、日本語に何がおこったのかを、このように考えていくと、今や定説になった感のある「シラビウム→モーラ」の変化に関して、「モーラ→シラビウム→モーラ」という流れを考えてみたくなる。

もともと日本語は「モーラ言語」であった。中国語との接触で、音の単位に関して混乱し、傷が付き「シラビウム言語」になった。そのときできあがってしまった、ひとつひとつの特殊な音を、その後、ひとつの単位と認識しはじめ、それにしがった表記法も次第に確立しはじめる。さらに、戦国時代から江戸時代にかけての、教育による識字率の拡大、つまり拍文字（モーラ文字）の確立とその普及で、大衆レベルで「治癒」の力が働き「モーラ言語」へ復帰したのであると、言えはしないかと考えるのである。

#### 4-2 言語内的な契機

ここでは、「長年の使用によることばの病理と治療」を、国語史の分野で考える。前節で述べたことが、いわば、外から侵入した異分子としての「病原菌」による病気と考えられるならば、ここで述べるのは、老衰・加齢による病気、つまり「成人病」にあたるような病理である。

さきに、この部分のひとつのボタンとして「音韻変化という摩耗」ということばを使用した。また、その結果として「弁別性が損なわれる」ということばも使用した。ことばは、長く使っていくうちに摩耗する。そして、伝達に障害がおこる。この分野を考えると、必ず思い出されるのが、中本正智先生のご論文「古代八行P音残存の要因 - 琉球に分布するP音について -」である。

これは、先生の残された数多くの論文の中で、もっとも価値の高い論文のひとつだと考えるが、琉球に [p] 音が残った遠因を、5母音から3母音へという母音推移に見、豊富な調査例を駆使しながら、その変化の過程をみごとにときほぐした論文であった。とくに、宮古・八重山での変化について、多くの新見を提出されたのであった。以下これを手がかりにしなが、卑見を述べる。

私は、琉球と同じような5母音から3母音への母音推移が、中古から中世にかけて、本土でもおこっていたと考える。中世、母音単独の [e] [o] は存在せず [je] [wo] にな

っていたことは定説になっているし、キリシタン資料などでは、[e] と [i] の混同・[o] と [u] の混同が多く指摘されている。また、本土各地の方言で、音韻体系としてそれらの区別がないところがあること、また、体系としての区別があるところでも、[e] と [i] の混同・[o] と [u] の混同の結果と見られる語彙が、大量に存在していることは広く知られている。琉球に、結果としてP音を残させたその遠い原因である「高母音化」は、広く日本全国を覆った音韻推移であったと見るのである。

中本先生が明らかにされた事実を、私のことばに変えていえば、琉球では、このような母音推移という「病理」に対して、子音の部分で「治療」を行った。つまり、無気喉頭化音に変質した新たな子音を作り出したり（奄美・沖縄）、強烈な摩擦雑音をともなう新たな子音を作り出したり（宮古・八重山）したのである。

しかし、同じ方向への音韻推移に瀕しながら、本土では、このレベルでの「治療」は施されなかった。もっと徹底的な「治療」が施された。それは、戦国時代から江戸時代にかけての、教育による識字率の拡大、つまり拍文字の確立とその普及にあると考える。つまり、5母音を基とする、その表記体系が普及することにより、大衆レベルで「治癒」の力が働き、5母音に戻されてしまったのであると考えるのである。

これと同じことが、すでにジリエロンによって指摘されている。つまり、フランス語の自由奔放な音韻変化が、書記言語としてのラテン語の普及によって、元に戻されたという事実である。

## 5、おわりに

小論では、言語地理学で照射されたことばの「病理」「治療」の考え方を、日本語の歴史の中に導入してみようとした。

音韻変化があまり激しくなく、識字率が高く、拍観念とともに、拍文字が十分に普及している現代日本では、自由奔放な変化を見せる方言の世界といえども、ジリエロンの見た世界に肉薄できないのではないかと、ずっと思ってきた。しかし、今回このように、歴史的に長いスパンで、また、地域的に広く見ていくことによって、すこし見えはじめたのではないかと思う。紙幅の関係で、第二回目の大量流入（明治）・第三回目の大量流入（現在）の時期における「病理」・「治療」について述べるができなかった。後日に期したい。国語史に暗くて疎い私であるから、基本的な所で大きな誤謬を犯しているような気がしてならない。大方のご叱正を期待するところである。

ことばの分布図作成が言語地理学の最終目的なのではない。その分布図を読みとること、解釈することによって、言語変化の一般理論を構築するのが最終の目的なのである。その地図の上には、規範や書記言語に左右されない自由奔放な言語変化の結果が並べられている。文献国語史学では（あまり）入っていけない、人々の心の中にまで入って行って、彼の心の中で、何が、どのように行なわれているかまでを見、それを理論化し、言語変化の

一般理論を構築することができるのが、この学問の醍醐味であり、真骨頂であろう。もっとも「人間らしい」言語史学だと思うゆえんである。「民衆語源」・「幼児語源」、それぞれに顕在化していない、心の中だけに存在する「ことばの変化の種(タネ)」が多く存在するであろうことが推察された。今後、この分野について深く考えていこうと思う。

(1994. 11. 30)

## 参考文献

- 中本正智 (1976) 「古代八行P音残存の要因 -琉球に分布するP音について-」  
『國語學』 第107集 武蔵野書院
- 馬瀬良雄 (1969) 「言語地理学 -歴史・学説・調査法-」『國文學 解釋と鑑賞』  
第34巻第8号 至文堂
- 徳川宗賢 (1993) 『方言地理学の展開』 ひつじ書房
- 高橋顕志 (1989) 「防衛システムからみた”民衆語源”」『日本語研究』 第11号  
東京都立大学 国語学研究室・日本語研究会
- 高橋顕志 (1991) 「幼児語源」 『日本語論考』 大島一郎教授退官記念論集刊行会編  
桜楓社

ドーザ著

松原秀治・横山紀伊子訳 (1958) 『フランス言語地理学』 大学書林

コセリウ著

柴田武・グロータース訳 (1981) 『言語地理学入門』 三修社

比較方言学のひとつの実践例として、授業で学生たちとともに、中本正智先生の「古代八行P音残存の要因 -琉球に分布するP音について-」を、毎年読んできた。緻密な調査とみごとな推論、変化過程の再構築に、学生は感動する。私も、読むたびに感動し、つい熱を帯びた授業になる。思い返せば、大学院の学生であった頃から、先生との対話はいつも熱を帯びていた。先生と話をさせていただくと、何でもできる、すぐできるという気分になった。暗い気分が、いつも明るくなった。

その後、大学に職を得て、学生と話をしているとき、「今、中本先生と同じことを言ってる」「今、中本先生が乗り移っている」と思う瞬間が何度もある。口調・身振り、まったく先生と同じことをしている自分に気付くのである。

私は、中本正智先生から、学問に対する情熱だけでなく、教育に対する情熱・人生に対する情熱をも、わけていただいた・・・と思う。

・・・今となっては、ただ、ご冥福をお祈りするばかりである・・・

(たかはし けんじ・広島大学 学校教育学部 助教授)